



Title	沖縄社会と日系人・外国人・アメリカン 会いとつながりをめざして	新たな出
Author(s)	安藤, 由美; 鈴木, 規之; 野入, 直美	
Citation	移民研究 = Immigration Studies(2): 81-90	
Issue Date	2006-03	
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6467	
Rights		

〈報告・記録1〉

文部科学省科学研究費 研究成果公開促進費補助金事業
シンポジウムとワークショップ
「沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン
—— 新たな出会いとつながりをめざして ——」

安藤由美・鈴木規之・野入直美

- I. 総説
- II. ワークショップ（1）日系人・外国人・アメラジアンの青年たちのアイデンティティとネットワーク
- III. ワークショップ（2）沖縄における国際結婚，子育てと教育
- IV. ワークショップ（3）ディアスポラと沖縄社会について学びたい学生のためのワークショップ

I. 総説

本稿では、2005（平成17）年11月26日および27日の二日間にわたって琉球大学で開催されたシンポジウムとワークショップ「沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン —— 新たな出会いとつながりをめざして ——」（以下、本事業）の様態を報告する。本事業は文部科学省科学研究費の研究成果公開促進費補助金の助成を受けるとともに（課題番号1741006，代表者安藤由美），琉球大学移民研究センターの共催で行われた。

本事業を開催した第一の目的は、われわれが平成12～14年度に文部科学省科学研究費の助成を受けて行った調査研究「沖縄におけるディアスポラのライフコース」（基盤研究（C）（2），課題番号13610211，研究代表者安藤由美・鈴木規之）の結果を発表するためのシンポジウムを開催することであった。この調査は、沖縄に定住する日系人・外国人・アメラジアンの人々を対象に、かれらの生活状況や意識を統計的調査とインタビューから明らかにしようというものであった。

本シンポジウムを立案した当初は、会場に調査対象者の方々を招いて、われわれの発表を聞いて頂く予定であった。しかし、企画を練るなかで、たんに調査結果を発表するだけでなく、多重エスニック社会沖縄におけるディアスポラ的状况にある対象者の方々にとって、お互いが出会い、共通の問題を話し合い、将来に向けてネットワークづくりができる場を提供しようということになった。このような趣旨をふまえて、二日間の日程のうち、第一日目はわれわれの研究成果の報告と、それに対する討論から構成されるシンポジウムならびに講演を行い、第二日目に、上述のような出会いとつながりをめざしたワークショップを開催することにした（プログラムは、資料1を参照）。

また、この問題について一般の関心をも啓発するために、研究や実践に関心をもつ研究者や学生、行政担当者のみならず、ディアスポラ当事者である日系人・外国人・アメラジアンの方々、

そして広く一般市民の参加をよびかけた。

そして、調査対象者も含めて、参加者の中には日本語を母語としない人々が含まれることがあらかじめ想定されたため、当日配布用の報告要旨集は、日本語だけでなく英語およびスペイン語でも提供し、二日間のすべてのプログラムにおいて、これら2つの言語の通訳を配置した。

シンポジウム会場では、琉球大学法文学部学生による、NPO法人アメラジアンスクール・イン・オキナワの活動に関するパネル・ブースも設けられ、主にアメリカ軍人と日本人の母親との間に生まれた、アメラジアンと呼ばれる子どもたちを対象とする教育施設である、同スクールの活動の様子を展示した。

テレビ、ラジオ、新聞、外国人向けミニコミ誌などあらゆるメディアを通じた宣伝が功を奏したのか、二日間を通してのべ200名以上の参加者に恵まれた。参加者には、日系人や外国人だけでなく、一般市民も数多く含まれ、この問題に対する関心の高さをうかがわせた。以下、二日間にわたるシンポジウムとワークショップの概要を述べたい。

第一日目は、「沖縄における『ディアスポラ』」と題して、シンポジウムを行った。前半（(1) 沖縄からの研究報告）では、先述したように、われわれの科研費に基づく調査研究の成果を報告した。登壇者および報告内容に関しては、本誌創刊号における「特集：沖縄社会とディアスポラ」とほぼ同一であるので、ここでは割愛する。当日は、報告の後、駒井洋氏（中京女子大学教授）ならびに関根政美氏（慶應義塾大学教授）が討論を行った。

後半（(2) 交差する視点－ネットワーク化の現場からの声）では、学術研究からネットワーク作りの現場および自治体行政のあり方へ議論につないでいくという趣旨から、3つの報告が行われた。まず、自身もブラジル移住経験がある田島久歳氏（城西国際大学）から、同じ日系人でも、本土系と沖縄系では、もともとの文化的背景や移民先の事情によって、思考や行動の様式が異なることが報告された。次に、日系アルゼンチン人の又吉パトリシア・イネス氏（琉球大学スペイン語講師）より、自身の来日や日本での生活を含めた日系人としての経験が語られ、それをふまえて、日系人を含めた在沖縄外国人の人材活用や国際交流施策に対する問題提起がなされた。最後に、自治体の国際交流行政に携わる立場から、國吉薫氏（沖縄県交流推進課）から、沖縄県の国際交流行政の現状と課題について報告がなされた。これらの報告の詳しい紹介は別の機会に譲るが、一点あげるとすれば、國吉報告の最後になされた、ウチナーンチュ意識やイチャリバチョーデーといった、沖縄固有のアイデンティティや文化を主張することが、かえって、外国人や日系人を排除したり、問題を隠蔽したりすることになりかねないのではないかという問題提起は、きわめて印象的であった。

第二日目は、「協働と共生に向けたワークショップ」と題し、「(1) 日系人・外国人・アメラジアン青年たちのアイデンティティとネットワーク」、「(2) 沖縄における国際結婚、子育てと教育」、「(3) ディアスポラと沖縄社会について学びたい学生のためのワークショップ」の3つの部会に分かれて、報告とディスカッションを行った。それぞれのワークショップの報告は次節以降を参照されたい。ワークショップ終了後、ふたたび、参加者が一堂に会し、総括討論を行った。

おわりに、本事業を開催した所感を最後に述べてみたい。まず、週末の午後二日間の開催にもかかわらず、主催者が予想した以上の参加者があったことから、沖縄社会におけるディアス

ポラの状況について、多くの方が関心をもっているということである。

2番目の点として、沖縄社会とディアスポラとの共存・共生に関して、学術研究と、当事者の方々、行政の現場との間で、連絡を密にし、ともに現状の認識と、問題解決にむけて働きかけをしていくことの必要性をあらためて感じさせられた。

この点に関して、筆者の個人的な感想を述べさせて頂ければ、行政側に求められるのは、日系人や外国人、アメラジアンといった当事者たちにサービスを提供し、問題を解決するような施策を講じることはもちろんであるが、もう一つは、行政を支える国民（つまり納税者）に対する情報提供や社会教育を行うことだろうと思う。われわれ学術研究に携わる側は、いわば、研究によって掘り起こした事実を発信する役割を担う。そして、それを当事者や一般市民にとどけるような中継点あるいはオーガナイザーとしての役割を、行政には果たして頂きたいと考える。

本シンポジウムとワークショップでは、われわれの調査の対象となった方達、すなわち、日系人、外国人、アメラジアンの人たち、ならびに、一般の方達も加わって、沖縄が多民族社会であることの認識を深め、いろいろな民族・文化的背景をもつ人々が、どのようにしたら、お互い共存していけるかについて、話し合うことができた。われわれ実行委員会は、ささやかではあったが、このような機会をご提供できたことを素直に喜ぶとともに、パネリストとしてご討論頂いた先生方ならびに話題提供者の方々、そして、ご参加頂いた皆様のご協力に、深く感謝申し上げる次第である。(安藤由美)

II. ワークショップ（1）日系人・外国人・アメラジアンの青年たちのアイデンティティとネットワーク

本ワークショップでは、2人の日系ペルー人の青年を発話者として、彼らの生きた経験を語り、また共有することで日系人・外国人の人たちの困っている経験や、アイデンティティの危機・葛藤、それへの対処法について意見を交換し、彼らによる彼らのためのネットワークを実際につくるにはどうしたらよいかを考えていくことが目的であった。

カルロスさんは、小学生の時に沖縄に来たが、その時の一番の驚きは日本語だと思っていたものが沖縄の方言であったことだった。学校生活を送る中では、自分のペルーでのふるまいが日本・沖縄の人たちとあまりにも異なっていたため、人と協調して目立たないようにまわりに合わせる努力をした。カメレオンのようなのだと思ったというのが印象的であった。日本国籍を取得した彼は、琉球大学で学び、つとめて日本人になるように努力した。しかし、カルロスという名前のためにアルバイトをしようとしても断られたり、仕事の上でもスペイン語以外にネイティブ並みの英語力を求められたりした。名前を変えようと思ったこともあった。もちろん日本語は日本人並みを要求されると彼は語った。

アントニオさんは、ペルーで高等学校を終えるころ日本のデカセギブームとなったため、3年間日本本土でデカセギをし、2年間ペルーに戻った後に来沖した。沖縄出身の人気グループ、ダイヤモンドスのマネージャーとして3年間、また歌手として7年間歌って過ごした。日本語を話すことは不自由しないが、漢字の読み書きはできない。自身は日本人、ウチナーンチュ、ペルー人このすべての面があるので、この3つを統合してエネルギーとし、沖縄社会で活躍し

たい、またこのエネルギーを使ってほしいと語った。日本語については、ひらがなやローマ字での表記など、もっと日系人や外国人に配慮すべきだと訴えた。

琉球大学卒業後、スーツを着用して沖縄国際センターや貿易の仕事に携わるカルロス氏は、もの静かでラテン系の気質、ふるまいをつとめて抑制しているとの印象を受けた。これに対して歌手やDJとして活躍するアントニオ氏は、ラフなスタイルで派手でジェスチャーを交えて大声で語る。ラテン系の気質、ふるまいをそのままに表現しているという印象であった。

この2人の発話者に対して、フロアからは以下のような反応があった。自身もブラジルに7年間移民をしており、帰沖後日本語の教育のボランティアなどを通して日系人の人々の支援をしてきた男性からは、訴えるだけでなく、まず自分で日本語を学ぶべきではないか、その上で行政に訴えかけるべきではないかとの意見が出された。これに対しては、ある年齢を過ぎて日本に戻ってくると日本語を学ぶことは難しいとの体験を語った反論があった。

また、子育て中の女性からは日本語のひらがな化や、もうひとつの文化がプラスになるように日系人同士でネットワークをつくっていくべきだとの意見があった。若い人たちは生活や子育てに追われ、行政に接点があるような国際交流団体の参加が少ない。今日のワークショップをきっかけに具体的なネットワーキングを構築するその出発点としたいと参加者、とくに当事者たちが確認しあい、ワークショップは終了した。

本ワークショップの終了後の全体会において、コメンテーターの関根政美氏（慶應義塾大学）は「日本人の顔をしているから日本語を話すのは当たり前」との常識が既に問題となっていると指摘し、オーストラリアの事例を挙げながら多文化性とは顔つきと文化、言語が1対1に対応しないという認識を持つべきだと論じた。そして問題を引き起こしているのは日系人・外国人の方ではなく日本社会にあると考えるべきだと強調した。さらに、行政に対して「物言い」をするときにはネットワークは大きい方がよく、日系人やウチナーンチュとしてまとまることも大切だが、県外にも広げていくことが大切だとのネットワークづくりの方向性のあり方を示唆した。（鈴木規之）

Ⅲ. ワークショップ（2）沖縄における国際結婚、子育てと教育

ここでは、私（野入）が「国際結婚、子育てと教育についてのワークショップ」でコーディネーターを務めることを通じて、会場で学んだことを整理しておきたい。以下に記述する話題提供者のお話の要約についても、文責はすべて私にあることをあらかじめお断りしておく。

この会場では、フィリピン出身のアイディ・クルザードさん、アメラジアン（アメリカ人）の母親であり、NPOアメラジアンスクール・イン・オキナワの代表理事であるセイヤーミドリさん、日系ブラジル人2世の比嘉マリアさんの3名の話者提供者に、ご自身の体験を語っていただいた。

クルザードさんのお話は、ご本人と同じくフィリピン出身のおつれあいと、1989年に沖縄に移り住み、そこからどのように沖縄社会への入り込みを果たしてきたかについてであった。ご夫妻は、まったく未知な環境である沖縄社会に入り込むために、キリスト教教会、職場、趣味のサークルなど、身近なネットワークのすべてを活用してきた。クルザードさんは、沖縄での生活を確立するまでの間に、心の温かいフレンドリーな沖縄の人々にどれだけ助けられたかを、繰り返し語られた。彼女の周囲の沖縄の人々の温かさは、彼女自身がすすんで新しく出会った

人々に心を開き、精一杯の努力をして沖縄の人々に接してきたことの反映であるように思われる。移住先の社会への入り込みは、やってきた人々と迎え入れる人々との相互作用のたまものであることを強く印象づけるお話であった。

セイヤーさんは、アメリカ人男性と結婚し、その後、一人で3人のアメラジアンの子どもたちを育ててきた。その国際結婚をご実家に激しく反対された体験からは、クルザードさんが語られた「フレンドリーな沖縄の人々」の像とは異なる、沖縄社会のもうひとつの現実が示唆されていた。セイヤーさんは、英語と日本語が学べるアメラジアンスクールを、他のお母さんたちとともに設立した。彼女の子どもたちは3人とも、そこで中学校課程までを学んだ後、沖縄の公立高校へ進学し、上の二人は県内の大学へ進学した。このように要約すると、大変なサクセス・ストーリーのように響くのだが、子どもたちは、さまざまな困難や葛藤を体験してきたという。例えば公立高校で、「アメラジアンだから英語ができて当然」と教師に判断され、非常に高いハードルを越えることを期待された子どもは、心の内面で、必死に周囲からの圧力と闘っていたという。そのようなことは、こうして体験を聞かないとわからない、なかなか想像が及びにくいことではないかと思わされた。

比嘉さんは、日系ブラジル人としてブラジルに住んでいた頃には「ジャポネ」（日本人）と言われ、沖縄の男性と結婚して沖縄に移り住んできてからは「外人？なんで日本人の顔なのに、日本語がしゃべれないの？」と言われた体験について話された。ぜひ、沖縄の人々には、日系人の事情を知って理解してほしいというメッセージであった。比嘉さんは、子どもの個性を認めない日本の教育に大きなショックを感じたという。例えば、「朝、家で用便を済ませてから登校させて下さい」という注意事項を聞いたときには、排泄の時間まで学校から指示されることがまったく信じられなかった。彼女はたびたびPTAで、違和感を述べ、意見を伝えようとしたが、「それはあなたが外人だからでしょう」という形で議論を打ち切られてしまうことが多かったという。沖縄ブームによりかかって、「イチャリバチョーデー」（会えば兄弟）という沖縄の人の心の広さを自明視せず、どのように日系人や外国人とつきあっていくかを考えていく必要があるのではないか、という意見が語られた。

ワークショップの後半は、会場からの質問や、意見交換が行われた。国際結婚の当事者である男性からは、「国際結婚で相手の嫌なところが見えたとき、異文化を尊重しないといけなからというのでそれをがまんするのか、それとも個人と個人の関係で、納得のいくまで話し合うべきか」という、当事者ならではの質問があった。また、国際児の教育の機会について、どのような選択肢があるのか、という質問が出され、選択肢が極めて限られていることが、話題提供者から、体験に裏づけられて語られた。その選択肢の乏しさは、日本だからなのか、沖縄だからなのか、海外ではどうなのか、といった議論も交わされた。さらに、日本人とイギリス人の両親を持つ、他府県からの参加者からは、国際児の教育の、公立学校以外の選択肢についてだけ議論が集中することへの危惧が述べられ、公立学校で、さまざまな葛藤を経ながらもこうして大人になった「ハーフ」の声にも耳を傾けてほしい、というメッセージが語られた。

会場には、英語とスペイン語の通訳が入り、日系人や外国人の参加者も、自分の体験を語り、情報を交換することができた。語られたことのなかには、その場では解決の見出せないこと、想像を絶するような厳しい体験もあったけれど、同じ沖縄に生きているひとりひとりとして、

語られた貴重なメッセージを共有し、お互いに支えあう次のステップへとつなげていきたいという熱気が、切実に感じられた。

ワークショップの後の全体討論では、駒井洋先生が、このワークショップについてのコメントをしてくださった。駒井先生は、ご自身も旧満州からの引揚者として、日本社会の中で異物である自分自身を常に感じ、さまざまな葛藤を闘い、その過程の中から、日本の社会学界において国際社会学という新たな領域を切り拓いてこられた方である。その駒井先生が、ワークショップの話題提供者のお話に深い共感を抱かれたことがひしひしと感じられるコメントであった。

駒井先生は、「国際結婚の当事者とその子どもたちは、受け入れ社会への変革者の役割を果たさざるを得ない人々である」と語られ、その人たちの闘いをいかにエンパワーしていくかが、多文化共生社会を作っていく上での重要な課題であると位置づけられた。私はこのコメントに触発されて、共生というのは、当事者の人たちが変革者という重荷を降ろして、ホッとすることができるときに成り立っているものではないだろうかということを考え、フロアに投げかけることができた。

このワークショップを通じて初めて知ったことは、とても列挙しつくすことができない。中でも、こんなにたくさんのさまざまな背景や体験を持つ人々が、これほど深い関心を持って集まったことへの驚きが、私にとっては最も大きな収穫であった。(野入直美)

IV. ワークショップ (3) ディアスポラと沖縄社会について学びたい学生のためのワークショップ¹⁾

本ワークショップでは、「沖縄市における、外国人が主体的に参画できる観光プランづくり」をテーマとして、参加者が5つの班に分かれ、それぞれ話し合いを行った。班内の意見をまとめる方法としてはKJ法²⁾が用いられ、セッションの最後には、各班が5分程度のプレゼンテーションを行った。

自由参加のセッションだったため参加人数が不確定であったが、各班に8名ずつ割り振られ、話し合うのに適した人数で行うことができた。各班には、後述のように沖縄にちなんだ食べ物の名称がつけられ、なごやかなムードで意見交換がなされた。班ごとの議論に移る前のイントロとして、参加者全体で、沖縄市が発行している観光客向けのパンフレットや、市役所が発表している沖縄市の外国人登録者数などの資料に目を通した。次に、事前に琉球大学の学生らが沖縄市ゲート通り周辺でフィールドワークを行った際に撮影された「YEN ONLY」の看板、「SLOW DOWN」と英語で大きく書かれている道路看板、様々な文化的背景を持つレストラン、小売店など、その地区の様子が伺える写真が紹介された。写真にはそれぞれ、撮影した学生によって解説がつけられた。イントロは20分程度行われ、その後班ごとの話し合いに移った。以下、各班のプレゼンテーションの内容を紹介する。

「ゴーヤー³⁾」班：観光客と市民をどうつなげるか。祭りや多文化を体感できる場所を設ける事によって、その先の交流を創造する。常に市民と行政が協働し、協議する場の存在によって、観光の中身が反省的につくられていく可能性が生まれる。

「ナーベラー」班：地域的取り組みと観光施設という2つのカテゴリーを描き、その融和点の可能性についても提示した。地域的取り組みは主に行政が主導となるような教育制度やTV

番組作りが挙げられた，観光施設は民間主体のテーマパーク作りのようなものが挙げられた。

「ソーキ」班：一泊二日の沖縄市観光ツアーのモデル図を提示した。ツアーには映画，音楽，料理などが組み込まれていた。表面的な文化を生産・消費してだけでなく，共生の可能性を探る議論をしていくことが課題として残った。

「クブイリチー」班：交流やイベントの企画によって，沖縄市側からのサービスの提供によるものだけでなく，観光客がその中に入っていき，共に活動するイメージを提示した。

「ミミガー」班：KJ法を使わずにワークシートを作成し，プレゼンテーションを行った。〇〇〇〇人や「ガイコクジン」に対して働きかけをするのではなく，ありのままをそれぞれ（観光客や住民）の眼で捉え，考えるということを提示した。アイデアには，沖縄の基地問題や，多文化・多国籍といった言葉（認識）に排他性が含まれることなどへの懸念が反映されていた。

参加者には，県内外の大学生，学校教員，留学生，高校生など多彩な人々が参加しており，それぞれの立場からの意見交換・議論は幅広く興味深いものになった。沖縄市内の外国人がどのような形でもって観光産業に主体的に参画できるのか。観光客や沖縄市以外の地域に住む人々にとっては，どのような関係性を結んでいけるのか。様々な文化的背景を持つ人々が，実生活においても，経済面においても共生・共働できる環境をいかにしてつくっていけるのか。行政のレベルからマイノリティー的立場に立った考え方まで，奥行きのある議論が展開された。

コーディネーターとしては，各班の意見が発表され終わった時点で終了時間となってしまう，数多く提示されたプランから，実際に実現可能な強度のある案を模索するための議論にまでつなげることができなかつたのが心残りである。だが，沖縄市の観光産業を，外国人住民が主体的に展開できるような，新たな可能性を見出せたのは成果であったといえる。（安藤由美）

注

- 1) 本ワークショップの報告は，当日コーディネーターを務めた琉球大学法文学部学生の川平永一郎ならびに眞地大地君のまとめを下敷きになっている。なお，本ワークショップは，両君のほかにも，古田亜由美さんを始めとして多くの琉球大学学生，そして，沖縄ワールドトリップの行程に組み込んで参加頂いた，約30名の国際基督教大学の学生諸君（引率：田中康博教授）のご協力を得て実現した。これらの方々に謝意を表したい。
- 2) KJ法とは，グループ作業によってテーマ別の解決に役立つヒントやひらめきを生み出していくための技法として文化人類学者川喜田二郎氏が考案したもので，アイデアや意見を1枚ずつ小さなカードに書き込み，それらのカードの中から近いもの同士を2，3枚ずつ集めてグループ化していき，さらに小グループから中グループ，大グループへと組み立てて図解していくという手順を踏む。
- 3) あらためて説明する必要がないかもしれないが，一応参考までに，ゴーヤー＝ニガウリ，ナーベラー＝へちま，ソーキ＝豚のスペアリブ，クブイリチー＝昆布の煎り煮，ミミガー＝豚の耳の意である。

（あんど う よしみ・琉球大学法文学部教授・社会学，
すずき のりゆき・琉球大学法文学部教授・国際社会学，
のいり なおみ・琉球大学法文学部助教授・社会学）

(資料1・日本語版)

文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費事業

シンポジウムとワークショップ
沖縄社会と日系人・外国人・アメラジアン
— 新たな出会いとつながりをめざして —

日程 2005年11月26日(土)・27日(日)

会場 琉球大学法文学部棟

11月26日(土) 12:30開場 13:00開始 17:30終了予定 19:00懇親会

第一部：沖縄における「ディアスポラ」琉球大学法文学部新棟215

(1) 沖縄からの研究報告

コメンテーター：駒井洋氏(中京女子大学教授)

- ① ルーツとしての沖縄—南米移民を中心に—石川友紀(琉球大学名誉教授)
- ② グローバル化と来日・来沖のプロセス—野入直美(琉球大学助教授)
- ③ 沖縄社会への定住過程と自治体サービス—沖縄のディアスポラとホスト社会との関係性をめぐる—考察—鈴木規之(琉球大学教授)
- ④ 異質な主体を生きる/異質な他者と向き合う「他者社会」の権力問題—沖縄における定住外国人・日系人の信用獲得戦略に関する調査から—崎濱佳代(慶應義塾大学大学院)
- ⑤ 次世代のエスニック・ネットワーク—国吉サオリ(沖縄キリスト教短期大学非常勤講師)
- ⑥ ウチナンチュ・ディアスポラの記憶と波動—現代沖縄社会と「移民」—金城宏幸(琉球大学助教授)

(2) 交差する視点—ネットワーク化の現場からの声

- ① 沖縄系、本土系日系人の比較に、日系人研究者が挑む—田島久歳氏(城西国際大学助教授)
- ② 沖縄で生きる、沖縄でつながる—又吉パトリシアイネス氏(琉球大学非常勤講師)
- ③ 自治体に寄せられる声、自治体が発信しようとしていること—國吉薫氏(沖縄県観光商工部交流推進課主幹)

11月27日(日) 12:30開場 13:00開始 17:00終了予定 17:30交流会

第二部：協働と共生に向けたワークショップ

(1) 日系人・外国人・アメラジアンの青年たちのアイデンティティとネットワーク

法文学部棟203A

(2) 沖縄における国際結婚、子育てと教育

法文学部新棟111

(3) ディアスポラと沖縄社会について学びたい学生のためのワークショップ

法文学部新棟112

(資料 2 ・ 英語版)

Grants-in-Aid for Scientific Research by the Ministry of Education, Science, and Sports
Promotion Expense Program for Publication of Research Results

Symposium and Workshop

Okinawan Society and Nikkeis/Foreigners/Amerasians —In Search of New Encounters and Ties—

Saturday, November 26

12:30 Doors open 13:00 Session starts 17:30 Session ends

19:00 Reception party

Part 1: "Diaspora" in Okinawa New Building of College of Law and Letters 215

(1) Research Report from Okinawa

Commentator: Prof. Hiroshi Komai (Chukyo Women's University)

- ① Okinawa as a Source of Emigration - with Special Emphasis on Emigration to South America - Tomonori Ishikawa
 - ② Globalization and the Process of Moving to Japan and Okinawa—Naomi Noiri
 - ③ Settling Process in Okinawan Society and Locally Governmental Services -A Consideration of the Relationship between Diaspora in Okinawa and the Host Society -Noriyuki Suzuki
 - ④ Living as a Foreign Individuals: Power Issues in an "others society" Facing Foreign Others -from the Research about Strategies for Trust Acquisition of Permanent Foreign Residents and Japanese Descendants in Okinawa—Kayo Sakihama
 - ⑤ An Ethnic Network for the Next Generation -- Saori Kuniyoshi
 - ⑥ Memory and Legacy of the Uchinanchu Diaspora: Contemporary Okinawan Society and Migration -- Hiroyuki Kaneshiro
- (2) Crisscrossing Viewpoints - Opinions from the Front Line of Networking
- ① Nikkei Researchers Tackles to Make Comparisons between Okinawan and Japan Proper Nikkeis—Hisatoshi Tajima
 - ② Living and in Okinawa, Forming Ties in Okinawa—Patricia Inez Matayoshi
 - ③ Opinions the Local Government Receives and Messages It Wants to Send Out—Kaoru kuniyoshi

Sunday, November 27

12:30 Doors open 13:00 Session starts 17:00 Session ends

17:30 Get-Together Party

Part 2: Workshop for Cooperation and Coexistence

- (1) Identities of Japanese - descent, Foreign, and Amerasian Youths and Networking among Them College of Law and Letters 203
- (2) Workshop on International Marriage, Child-raising, and Education in Okinawa New Building 111
- (3) Workshop for Students Hoping to Learn about Diasporas and Okinawan Society New Building 112

Commentator of General Discussion: Prof. Masami Sekine (Keio University)

(資料3・スペイン語版)

Fondo de ayuda para las investigaciones Científicas del Ministerio de Educación y Ciencia
Promoción pública de los resultados de la investigación

Simposio y Mesa redonda

La Sociedad Okinawense y Los Nikkeis, Los extranjeros y Los Amerasians

—En busca de nuevos encuentros y nuevos lazos—

Sábado, 26 de Noviembre

Entrada 12:30 Inicio 13:00 Clausura 17:30 Fiesta de recepción 19:00

1ra. Parte: “La diáspora” en Okinawa Nuevo pabellón de la Facultad de Leyes y Letras aula 215

(1) Informes de la investigación en Okinawa

Comentarista: Prof. Hiroshi Komai (Universidad Femenina Chukyo)

- ① Un enfoque basado en la inmigración okinawense a latinoamérica - Okinawa como lugar de origen—Tomonori Ishikawa (Profesor decano de la Universidad de Ryukyu)
- ② La Globalización y el proceso de llegada a Japón y Okinawa - Naomi Noiri (Profesora titular de la Universidad de Ryukyu)
- ③ Proceso de establecimiento en la sociedad Okinawense y los servicios municipales - Una mirada relacionada entre la sociedad okinawense y la diáspora - Noriyuki Suzuki (Profesor de la Universidad de Ryukyu)
- ④ Conflictos sobre la heterogeneidad en la sociedad Okinawense - Kayo Sakihama (Estudiante del Curso de doctorado de la Universidad de Keio)
- ⑤ La red étnica de la nueva generación - Saori Kuniyoshi (Profesora asociada de la Universidad Cristiana de Okinawa)
- ⑥ “El uchinanchu” :su memoria como diáspora- “Los emigrantes” y la sociedad contemporánea okinawense-Hiroyuki Kinjo (Profesor titular de la Universidad de Ryukyu)

(2) Un cruce de prismas -Opiniones de la red étnica

- ① Desafío de un científico Nikkei en el estudio comparativo entre el Nikkei de Okinawa y el Nikkei de Japón-Prof. Hisatoshi Tajima (Universidad Internacional Josei)
- ② La Vida en Okinawa, vínculos en Okinawa—Prof. Patricia Inés Matayoshi (Profesora asociada de la Universidad de Ryukyu)
- ③ Opiniones brindadas al municipio y mensajes que las municipalidades desean transmitir —Sr.Kaoru Kuniyoshi (Dirigente del departamento de Promoción e Intercambio del Area de Turismo, comercio e Industria de Okinawa)

Domingo, 27 de noviembre

Entrada 12:30 Inicio 13:00 Clausura 17:00 Fiesta de recepción 17:30

2da. Parte: Taller de propuestas sobre la cooperación y la coexistencia

(1) La red social y la identidad en los jóvenes nikkeis, extranjeros y amerasians

Facultad de Leyes y Letras aula 203A

(2) Taller sobre el matrimonio internacional, la crianza y la educación de los niños en Okinawa

Nuevo Pabellon aula 111

(3) Taller para estudiantes con interés en la diáspora y la sociedad okinawense

Nuevo Pabellón aula 112

Comentarista general: Prof. Masami Sekine (Universidad de Keio)